

患者自身の人生のなかで腎臓病を意味づける — 真の個別化医療

古波蔵健太郎*

最近、精緻医療 (precision medicine) や個別化医療という言葉を耳にする機会が増えてきました。Precision medicine に関しては、とくに癌領域で個人の遺伝情報などにに基づきより個人の特性に合った精緻な医療を提供できるように精力的に研究が進められています。先頃、開催されたアメリカ腎臓学会でも precision medicine に関連したプログラムが多くみられました。腎臓の分野でも特定の遺伝子が腎障害の進展に関わっていることがいくつか報告されているものの、日常診療の場で幅広く応用されるまでには至っていません。しかし、実際、個々の患者の特徴に目を向けると、同じ原疾患病名でも腎障害の進展に関わる病態 (炎症、糸球体高血圧や虚血などの血行動態異常など) が異なっていることに気づきます。したがって腎障害進展に関連する病態を介入可能な形として因数分解し“見える化”することで、個人の病態に合った最適な個別化医療を提供できると考えられます。

近年、大規模ランダム化比較試験やメタ解析の結果が最良のエビデンスであり、それに基づいた診療を実践することが重要であることが声高に叫ばれてきました。しかし、本来、evidence based medicine はそのようなリサーチの結果に基づく診療だけを実践することを意味するものではなく、① リサーチから得られたエビデンス、② エキスパートや各医師の経験に基づく意見、③ 患者の希望、の三つを

* 琉球大学医学部附属病院血液浄化療法部

統合して医療を実践する過程を指しています。また、医療を行う地域や施設といった local なファクターを考慮することも必要になります。このなかで医師と患者が情報を共有しながら検査や治療方針に関する意思決定を共同作業で行いますが、このような意思決定過程を shared decision making (SDM) と呼んでいます。

われわれは10年以上前から、前述の個々の患者の“病態の見える化”による治療方針の決定に際して SDM (SDM という用語は知りませんでした) を実践してきました。そのなかでは自施設の治療成績に関する情報提供も行っています。さらに、患者の現在の生活や人生設計のなかで腎臓病がどのような形で影響しうるのか、“人生における腎臓病の意味づけ”を確認しながら意思決定をサポートしています。腎代替療法の選択においても専門外来を設けて、医師、看護師が協力して“人生における腎代替療法の意味づけ”を患者と共同で確認する作業をかなりの時間を割いて行うことで、患者の価値観や希望といった面も取り入れた真の“個別化医療”を提供できるように努めています。このような共同作業を通じて腎代替療法を選択できた患者の多くが、不安一色だった表情から希望をもった明るい表情になっているのを見ると、自分の人生に関わる重要な“腎臓病の治療方針”に関して主体的に意思決定に関わることが、患者の幸福度に大きく寄与するのだということを強く実感します。